

# 図画工作科における関心・意欲を高める指導の在り方

指導主事 吉 村 茂

Yoshimura Shigeru

## 要 旨

小学校図画工作科の内容は「表現」と「鑑賞」から成り立っている。これら二つの学習を支える土台となっているのが、造形への関心や意欲である。しかし、学校では見栄えのよい作品づくりのための技術指導にばかり目が向けられて、本来大切にされるべき子どもが関心や意欲をもって発想を広げ主体的に取り組む創造活動が十分なされていない現状がある。そこで、「表現」や「鑑賞」の活動の中で行う関心・意欲を高める工夫について様々な視点から研究し、学ぶ意欲を高める指導の在り方を探る。

キーワード： 図画工作科、関心・意欲、魅力的な題材、豊かな情操

## 1 はじめに

「最高の図画工作科の授業は、6年間、図画工作嫌いを出さないこと」という考え方がある。子どもが、「好き」「やってみたい」という気持ちなしには図画工作科の授業は成り立たない。しかし、楽しいだけでは、本来図画工作科で身に付けさせるべき資質や能力は培われない。子どもが楽しみながら意欲的に活動でき、基礎的な能力を育成するためには、どんな題材設定をすればよいか。一人一人にどのようにかかわることが効果的なのか。教員が常に悩み考えていることを研修講座や学校での実践等を基に考察し、子どもの学ぶ意欲を高める指導の在り方について考えてみたい。

## 2 研究目的

要請訪問や研修講座等の内容を分析・考察して、いかにすれば子どもの学ぶ意欲を引き出す授業ができるかについて考察する。

## 3 研究方法

- (1) 学習指導要領の図画工作科の目標及び内容における学ぶ意欲の分析
- (2) 学ぶ意欲を高める指導についての事例研究

## 4 研究内容

- (1) 学習指導要領の図画工作科の目標及び内容について

図画工作科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、つくりだす喜びを味わうようにするとともに造形的な創造活動の基礎的な能力を育て、豊かな情操を養う。」である。ここでいう「表現及び鑑賞の活動を通して」とは、図画工作科が児童一人一人の感じたことや想像したことを造

形的に豊かに表す表現と、身近なものや作品などからそのよさや美しさなどを感じ取り、見方を深める鑑賞を基にする学習活動を示している。また、「つくりだす喜びを味わうようにする」は、一人一人が形や色などに働きかけながら発想を広げ、自分らしい表し方で思いを実現していく楽しさや喜びを味わうことであり、それが、表し方を工夫するなど造形感覚や創造的な技能などの「造形的な創造活動の基礎的な能力」を育てることと一体となって「豊かな情操を養う」ことができるのである。ここでいう「豊かな情操」とは、よさや美しさ、優しさなどの価値に向かう傾向をもつ心情のことであり、もっとも人間らしい意思や感情のことであると言われる。

図画工作科で身に付ける能力は、「造形への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」の四つの観点で示される。それらの観点はそれぞれが独立したものでなく、互いに関連し合っってより効果的に働くものである。その中でも「造形への関心・意欲・態度」は他の三つの能力を身に付けるための基礎となるものであり、それらとより密接に関連し合っているといえる。(図1)

児童は、自分の思いや願いを絵にしたり、形に表したりするなど、人としての根源的な表現の欲求をもっていると考えられる。この欲求を満足させ、表現の喜びを味わわせることが図画工作科の重要なねらいであり、「造形への関心・意欲・態度」がこの基盤となる重要な観点であるといえるだろう。

図画工作科の目標を受けた内容は、創造的な想像力などを働かせ、か

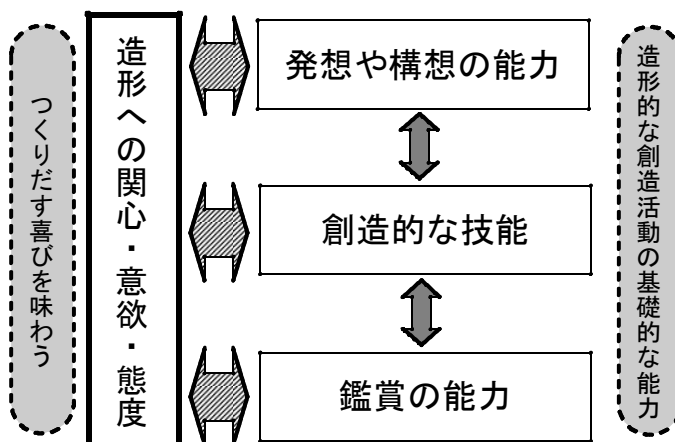


図1 四つの観点の関連

たりつくったりする表現活動を行う「A表現」と、作品や表現活動の過程などを自分らしい感じ方や見方によって、そのよさや美しさなどを味わう「B鑑賞」の二つの領域で表されている。更に、「A表現」は、(1)材料などを基にして、楽しい造形活動をする(通称:造形遊び)内容と、(2)感じたことや想像したことなどを基にして、絵や立体に表したり、つくりたいものをつくったりする内容に分けて示されている。A表現(1)では、身近な材料の形や色などから楽しい造形活動を思い付き、体全体を使って材料を並べたり、積んだりしながら、思いのままに表すことを楽しみ、もてる力を働かせるようにすることをねらいとしている。また、A表現(2)では、児童が自分の表したいことを進んで見付け、その思いをふくらませ、形や色、材料などを選び、表し方をいろいろ試しながら思いのままに表すことができるようにすることをねらいとしている。自分の表したいことを進んで見付けたりいろいろ試しながら思いのままに表したりすることや、自分らしい感じ方や見方をもつこともすべて子どもの関心・意欲の高まりによって支えられる主体的な活動であると考えられることから、「造形への関心・意欲・態度」がすべての内容の基礎となっているといえるだろう。学習指導要領の各学年の目標が(1)造形への関心・意欲・態度に関する目標と、(2)A表現に関する目標、(3)B鑑賞に関する目標の3点にまとめて示されているのは、(1)の目標は(2)と(3)の目標のそれぞれに関連しており、(2)と(3)の目標は互いに働き合う関係にあるためであり、学年目標を実現するに当たっては、それぞれが相互に関連し働き合っって造形的な創造活動の基礎的な能力の育成を目指すように内容を選択し構成

することが大切である。

## (2) 学ぶことへの関心・意欲を高める指導方法の工夫

### ア 一人一人の思いを実現させる支援の工夫

近年、全国的に広がりを見せている「～式」などのマニュアル化された製作方法では、見た目には高いレベルの作品ができる。しかし、技術的に高度な作品をかかせることのみが図画工作科の目的ではない。製作活動を通して子どもの「豊かな感性や情操を養う」と目標にあるように、一人一人が思いをもって表現方法を探り、失敗しながら試行錯誤を続け、自分らしい表現を求めていくところに意味がある。その過程で、子どもはかけがえのない自分を見付け、自分の表現や存在を肯定的に受け止められるようになる。そして、同じ取組を通して見付け出した友達の表現や存在をも肯定的に受け止められることにつながる。これこそが創造的な姿勢であり、生きる力をはぐくむことになると考える。試行錯誤の結果、自分の表現方法を見付け、思いを表現できたときの達成感や満足感が、次の活動への意欲となるのである。

そのためには、まず子ども一人一人の思いを的確に把握することが大切である。個々に声かけをしたり製作カードを活用したりしながら、子どもの思いを肯定的に受け止め、それを実現させるための適切な支援を工夫する。活動の途中で困っている子どもには、その子どもの思いに寄り添いながら、解決のために有効なアドバイスや、素材・用具等の物的支援を必要に応じて与えるようにし、指導者が事前に想定した方向に引っ張ろうとしないことが大切である。ただし、子どもの活動が学習のねらいや目標から逸脱しそうな場合は、子どもと話し合いながら軌道修正することは必要である。指導者は題材を設定するときに、その中で子どもがすると思われるあらゆる活動を予測して柔軟に対応できるようにすることが、子ども一人一人の活動意欲を高め持続させることにつながると思う。

### イ 子どもの興味・関心を引く学習展開の工夫

子どもに気付かせたいことや理解させたいことが明確になるような学習展開を工夫することを、まず心掛けるべきである。例えば、鑑賞と表現を連携させた取組では、ねらいに適した表現の名画を鑑賞させて、その表現のよさや美しさ、おもしろさを味わわせ、子どもが表現してみたいという意欲を高めることができる。しかしここで注意すべきことは、名画から感じ取ったよさや美しさ、楽しさをダイレクトに表現につなぐ展開は、ときとしてその表現技術の問題から消化不良を起こす場合がある。あくまで様々な表現方法に気づき、自分らしい表現方法を工夫する意欲を喚起するようにしたい。

次の事例は県内小学校で実践された、鑑賞のねらいを明確にした展開を工夫したものである。

#### 実践事例 1

1 題材名 『みずはなにいろ?』(第3学年) A表現(2) B鑑賞(1)

2 題材の目標

- ・作品のよさや美しさなどに興味・関心をもって見る。
- ・表現方法を工夫し、イメージをふくらませて自分らしい水をえがく。
- ・友人や自分の作品を鑑賞し、表現の共通点や違いを見付け、美しさや面白さに共感したことを話し合う。

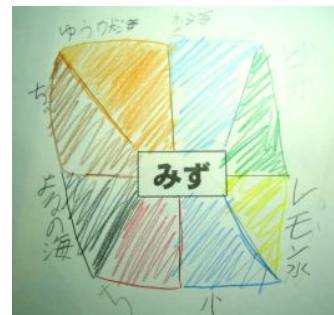
3 指導計画(全8時間)

第一次 水彩絵の具の使い方を知る。

- 第二次 水のイメージをふくらませる① 〈ブレインストーミングを活用して〉  
 水のイメージをふくらませる② 〈トリミングした写真を活用して〉
- 第三次 心に残った水のある場面をかく。
- 第四次 「みずはなにいろ」鑑賞会をする。

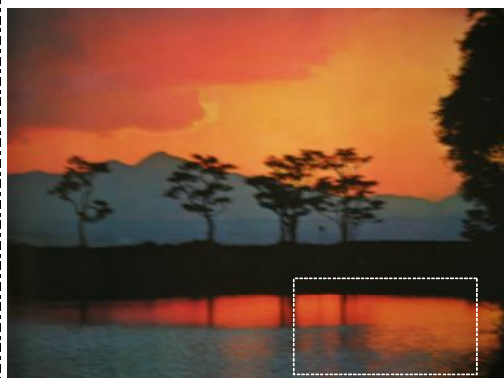
① ブレインストーミングによる発想のふくらませ方を工夫した展開

水のイメージをふくらませるために、ブレインストーミングを取り入れ、水からイメージするものや色、感じなどを経験を基にどんとカードに書き込み、楽しみながら固定観念をくずすようにした。それによって、それまでの「水色、冷たい」といった決まったイメージから、「輝き、爽やか」など様々な水の様子から連想される幅広いイメージが広がった。



② 水の部分をトリミングした写真を用いた展開

コンピュータとプロジェクターを使って様々な水の様子がある風景写真の水の部分を見せ、



クイズ形式で水の変化に気付かせた。赤い色の水や硬い板状に見える水に驚く子どもが多かった。この場合、初めから全体を見せるのではなく、トリミングした水の部分だけを見せることで、何だろうといった興味を喚起し、

あとで全体写真を見せると、より効果的である。

(←実際は夕日の赤い水面)

(3) 学ぶことへの関心・意欲を高める題材開発の在り方

子どもの関心・意欲に最も大きな影響を与えるのは題材設定である。子どもにとって魅力ある題材は、提示するだけで目が輝き、早くやりたい、つくりたいという思いでいっぱいになる。そのとき、子どもはすぐに頭の中で自分の活動している様子を思い浮かべ、表現方法や使用する材料まで、どんどん思いを広げていくようになる。

そこで、子どものやる気を引き出し、意欲的に活動する題材開発の在り方について考察する。開発のポイントとして、次の点があげられる。

- ① 子どもにとって魅力的な素材や用具を活用する題材
- ② 活動内容が楽しく、できそう、やってみいたいという思いがもてる題材
- ③ 個々の能力に応じて達成感を得られる題材
- ④ 試行錯誤をしながら何度もやり直しができる題材
- ⑤ 自分で材料や用具を選び多様な表現が可能な題材

子どもがパスやクレヨンに初めて出会ったとき、喜んで自由にかいたり塗ったりしてその色や感触を楽しむように、初めての素材や用具を活用した題材は子どもにとって大変興味深く、意欲的に取り組むことができる。また、新聞紙を使って全身を飾り付ける造形遊びなど、活動内容が楽しく全身を使って様々な工夫ができる題材も効果的である。子どもが自分でテーマを決めてそれに向かって材料や用具、表現方法を自由に選んで製作する題材設定は、一人一人が

意欲的、主体的に取り組むことができる。また、個々に到達目標があるため、それぞれの能力に応じて達成感が得られる。さらに、製作過程で何度でも形をつくりかえることができる粘土のような可塑性のある素材は、試行錯誤しながら意欲的に自分の表現を追求することができる。

次の事例は県内小学校で実践された、子どもの興味・関心を高める題材設定を工夫した例である。

## 実践事例 2

1 題材名 『ようこそ、雲の世界に』（第3学年） A表現(2) B鑑賞(1)

2 題材の目標

- ・材料の感触を楽しみ、のびのびと表すようにする。
- ・つくりながら想像を広げ、想像したことから材料のモチ味を生かしてつくる。
- ・自分なりの世界をいろいろな材料を使いながら表し方を工夫する。
- ・自分の作品や友達の作品のよさやおもしろさに気づき、共感したことを話し合う。



3 指導計画（全5時間）

第一次 自分なりの雲の世界を想像し、自分の想像した雲の世界をつくることを楽しむ。

第二次 それぞれの作品をつなぎ合わせたり、並べたりすることによって、新たにイメージを広げ、ひとつの大きな作品に仕上げる。

第三次 できあがった作品のよさやおもしろさを味わう。

○ 木工用接着剤を素材として扱う題材設定の工夫

木工用接着剤を雲に見立て、そこから発想を広げ、自分なりのイメージで雲を表現する取組である。本来、木工用接着剤は材料を接着するものであるが、その独特な感触や次第に固まっていく性質を生かして素材として扱うことは今までになかった新しいアイデアであるといえる。実際、子どもたちは、教員の説明に驚き、歓声をあげ、興味津々の目を見せた。こわごわ接着剤にさわる子どもも、すぐに感触を楽しみながらかき混ぜたり、延ばしたり、盛り上げたりして、どんどん活動が広がっていった。初めての材料や用具を使用することはもちろん、使い慣れた材料や用具なども、その特長を生かしながら活用の仕方を工夫することで、子どもの関心・意欲を高めることができるのである。



(4) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための評価の在り方

評価もまた学習意欲の高揚に大きく影響を与えることは周知のとおりである。評価には大きく次の三つが考えられる。

○ 自分の評価

活動途中又は活動後に、自分の表現をめあてに照らして表現内容や作品の完成度等について製作カード等を活用して振り返り、その後の活動に生かす。

○ 友達等による評価

活動中の友達との自然な会話や活動後の意見交流等で、友達のがんばりや表現のよさ、工夫点等について、相互に認め合ったり、アドバイスし合ったりし、その後の活動に生かす。

○ 指導者による評価

指導者が個々の子どもの活動を評価規準に基づいて評価し、それを基に一人一人のがんばりや活動内容に見られる工夫を認めるとともに、改善点について指導する。

「指導と評価の一体化」が叫ばれているが、指導者の評価が未だに完成作品を見ての評定のみに終わっていることも少なくない。評価カード等を活用する等、個々の活動全体を常に見る手立てを講じ、タイミングよくアドバイスしたり、活動意欲や表現の工夫をほめたりすることで個々の活動が認められ、意欲が高められるのである。また、表現と鑑賞を効果的に取り入れた展開を工夫することにより、表現活動の合間に自分や友達の作品を鑑賞し、意見交流することで、自己評価や友達の評価がその後の表現活動に生かされ、表現の方向性が明確になる。

子どもの学ぶことへの意欲を高めるためには、まず、子どもの発達段階や欲求を把握し、それに基づいて魅力的な題材を提示し、子どもの主体的な創造活動を促す。そして、そこには活動を通して育てたい資質や能力が明確にされていることが必要であり、その達成に向けて子ども一人一人の活動に合わせた適切な指導・支援・評価を行うことにより、成就感や満足感を得られるようにすることが大切である。(図2)

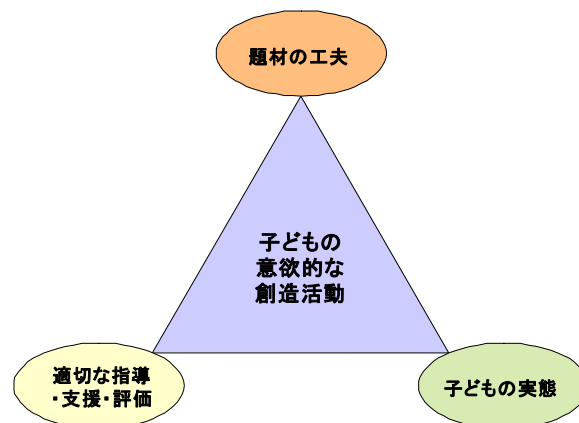


図2 意欲的な創造活動のための三つの要素

## 5 おわりに

今日、学校教育で重要とされている豊かな感性、創造性の育成には、図画工作科がその大きな役割を担っているといえる。子どもの学ぶことへの関心・意欲を高める手立てを更に工夫し、主体的に創造活動に取り組む図画工作科の学習を通して、豊かな感性や創造性を身に付けた子どもの育成を図りたい。

## 参考・引用文献

- |     |   |        |     |
|-----|---|--------|-----|
| (1) | 文部省「小学校学習指導要領」解説 図画工作編                    | 日本文教出版 | 平15 |
| (2) | 「形」 -FORME- No. 281-2006、282-2006         | 日本文教出版 | 平18 |
| (3) | 「図画工作 みかたがかわる授業づくり」<br>西村德行 -筑波大付属小学校-    | 東洋館出版社 | 平17 |
| (4) | 「学力の質的向上をめざす造形科授業の創造」<br>國清あやか -広島大付属小学校- | 明治図書   | 平17 |